

# 舞踊か？ 体操か？

城田由美子

## 要 旨

現在、エアロビックス、ジャズダンス、ジャギーなど体操と舞踊の中間領域のものが流行している。これらの現象をどのようにとらえたら良いか？ この問題を解決するにあたって体操と舞踊の概念を歴史的にさかのぼって規定し、この概念から、現代の現象を分析し、解釈した。

現代の傾向は体操と舞踊が相互に滲透し合い、両者の差異は判然としなくなっている。即ち体操的舞踊、舞踊的体操が出現して来たわけである。これはある意味で現代の文化現象を象徴しているように思われる。

## 序

昨今、舞踊と体操の両領域が、お互に滲透し合い、その境界線が判然としない。

ジャギー、エアロビックス、ジャズダンス等々、という新ジャンルの登場とともに、このような傾向は、益々強まって来た。では舞踊と体操の境界線をどこにひいたら良いか、など、さらには両者の今後の進むべき方向など、現状をふまえた上で概念規定にさかのぼって考えていきたいと思う。

発生論的には舞踊は本来、人間の表現活動であって、内面的なものの表出、外面的なものの表現（自然模倣）であった。他方、体操はあくまでも、体の鍛錬のため生まれたものであって、当初は両者は、判然と区別されるべきものであった。しかし昨今、舞踊が体操同様な抽象的表現を取り入れるとともに、体操（とくに床運動など）も表現的要素を重視するようになって、両者が、表現、鍛錬という対立する両極から歩み寄った結果、両者の境界が判然としなくなったのである。

このような現象をどう考えたら良いか、又両者の今後進むべき方向はどうかであろうか、など考えてみたいと思う。

## 第一章 舞踊の概念

本来舞踊は、あくまでも芸術の一ジャンルである。その意味で舞踊は、美的価値の表現を目的としなければならない。

しかし発生論的にみるならば、踊るということは人間の歴史よりも古い。というのは、ある種の動物でも本能的に踊ることを知っていたからである。といっても、この場合踊るといふのは感情（Emotion）によって喚起された動き（Motion）を意味し、我々が現在考えているような舞踊と異なるのは云うまでもない。

いわば本能的に生命力をリズムカルな形態に移すこと、これが踊りであって、この意味での踊りは人間以前にさかのぼることができる。そして、この本能的な踊りが人間によって、人間の技術によって、人為的により美しく、より快く表現されることになる、芸術としての舞踊が誕生する。つまり演技者とそれを観る者に対して同一の意味をもつリズムカルな形態に生命力を移すべく、技術によって、熟練によって、努力、計画がなされるようになった段階になると芸術としての舞踊が登場する。したがって舞踊の発生は芸術の中では最も古く、すべての芸術の基礎を提供するものである。

舞踊から演劇が、装飾が、音楽が生まれる。舞踊はこのようにして、すべての芸術の母として、美の表現を目的とするべきであるが、美を表現するという目的以外の目的、即ち芸術以外の目的をもっているものもある。たとえば娯楽舞踊とでも称せられるもののように、娯楽追求を目的とするものもある。即ち、踊り手が自ら体を動かすことによって、そのリズムを楽しむ、又他人が体を動かすのを見て楽しむものである。

（例えば、社交ダンス、フォークダンス、郷土舞踊など）又さらに舞踊の中には実生活上の目的に奉仕するものもある。例えば宗教舞踊、魔術

的舞踊、踊りの舞踊、医療の舞踊、体育のための舞踊などである。

これらのものも、たしかにある意味では美の表現に無関係ではない。したがって芸術的舞踊と呼んでもよいが、あくまでも美の表現が二の次になるので、そうよばない方が好ましい。

芸術舞踊が美的表現を目的とする以上、当然、各時代、各国民、各民族、各地方により、表現主体が精神を異にするため、独特の表現方式が生まれ、そこに様式的特徴がみとめられるようになる。クラシックバレエとモダンバレエの差異、ロシア舞踊とスペイン舞踊、日本における東北民踊の差異がこれである。

このような様式的差異が、みとめられるにせよ、舞踊はあらゆる時代に、あらゆる国に、あらゆる地方に存在するということができよう。ではこのような千差万別な舞踊を一語で規定するとしたら、何であろうか、先述の如く「舞踊は感情に惹き起こされた運動である」とすると、それはたしかに原始時代の舞踊を説明するには役立つであろうが、現代舞踊を説明することはできないであろう。

発生的には、身体によって感情表現（表出）するものが、舞踊であった、しかしそればかりではない。

他の芸術（とくに絵画など）にみられるように自然を模倣し、表現することも舞踊の目的である。即ち、内面的表現（表出）と外面的表現（模倣）が舞踊の主な目的であったとみてよいであろう。ところが、芸術上の抽象主義の登場と相まって、舞踊の中にも具体的な事物の表現を放棄し、あるいは単なる感情表現を避け、抽象的な幾何学的構成の美を

表現するようなものが登場して来た。モダンダンスと呼ばれるものの中にはこの種のものがある。この場合たしかに美的表現を目的としているので芸術舞踊と云い得るが、舞踊本来の目的たる感情表出は放棄し、純然たる形式美の表現に向う。熱い感情的表現から非人間的な冷たい知的表現へと向かうのである。この方向は、ある意味で現代の知性中心的文化を象徴しているといえようが、舞踊が本来の機能を自ら放棄したと云うことができよう。

こう考えて来ると舞踊はどう定義したらよいであろうか、表現内容がいかに変化しようとも舞踊は表現である。しかも人間の身体による表現であり、さらに人間の身体運動による表現である。

絵画が色と形による表現であり、音楽が音による表現の芸術であると、同様に舞踊は人間の身体的運動による表現の芸術である。

舞踊は運動の芸術である。

もっとも舞踊の中にも静止の状態はある、特に日本の能においては、それが顕著である。非常にはげしく回転する情念を、舞台上に一点を占めて動かない静止の姿で表現する。これが能の根本にある理念である。いわゆる「居グセ」は舞台上に坐って動かぬ姿をいうが、これこそ動く以上の高度の表現の持続である。動かず居ることが、もっとも強い表現であるというのが能の手法であり、日本人の美意識の特色である。ジャン・ルイ・バローをして「能の静止は息づいている」と云わせたのも、この能の手法である。動かずに居る技術は、いかようにも動きうる役者によってはじめて可能なのである。

このようにして舞踊においては運動のない瞬間、すなわち静止も運動の一部とみなされる。否、それどころか静止は運動の集約点、究極点であるということが出来る。それはちょうど音楽において音のない休止も音の一部とみなされているのと同様である。

かくして舞踊は休止をも含めた運動の芸術である。しかしこの場合、運動とは筋肉の運動を指すのではなく、身体がえがく空間運動を意味する。したがって、新たな空間形成の芸術、これが舞踊であるといえよう。今までに述べたところを総括すると「舞踊とは人間の身体そのものを表現素材として、その運動によって、新たな空間を形成し美的価値を表現する芸術である」と云うことができよう。

では次には体操とは何か、その発生にまでさかのぼり、歴史を追ってその概念規定を述べてみたいと思う。

## 第二章 体操の概念

本来体操は肉体的発達を促進するためか、あるいは、スポーツとして実践される身体的鍛錬を意味したのであるが、歴史的にみた場合には必ずしもそうでない時代、国もあったと思われる。そこで、体操についての考えを歴史的に検討してみたいと思う。

未開人にあつては生活そのものが、強い体力を必要とするはげしい戦であったので、自然に筋力や、持久力や、敏捷性が訓練されたのである。そしてこの様な訓練は種族の軍事訓練にも通じていくのである。他の種族を攻撃する場合、あるいは他の種族から攻撃された場合、自分の種族

を守り、あるいは勝利に導くためには身体訓練は必須のものであったのである。なお、その他、呪術的な体操が行われたという記録もあるが、これは体操のもつ実践的目的を表わしている。

古代ギリシャに入っても体操や、スポーツが軍事的な訓練や農事の儀式と関係していた。ただギリシャの場合は体操が、ただ戦争のためばかりでなく、美意識の発達しているギリシャ人は人間の美しい体、調和のとれた美しい体、体操によって鍛えられた美しいからだにあらがれ、各自がそうなるべく努力したのである。そして、かれらは美しいからだにこそ善良な精神が宿ると考えたのである。

この意味で心身の調和をめざす体操思想はギリシャ独特のものである。

中世になっても野望ある領主はなによりもまず強い武士を育てあげることに力を入れ、領地を安定させるためにも、他の領主たちを従えるためにも武術を奨励することが第一であった。

この時代の体操の主流は、この様に武士を中心とした軍事的訓練に代表されるが、武士や騎士はただ武芸に精進するだけでなく、人間修業の道を励まねばならなかった。いわゆる騎士道がそれであり、キリスト教により支えられていた。

ルネサンスに入ってからには、火薬や、大砲の発明、戦車の出現が身体訓練を変化させて行き、陸戦術よりも、海戦術が、それよりも外交的手腕が重んぜられ、フィレンツェでは、武芸より財力や機械の知識が尊ばれた。

体操は武力のためにはなく広範な身体的趣味、ダンスや狩、水泳などの種目に通じた粹人が理想のタイプとされた。そして、このような種目の高尚な体育を専門家が指導するようになった。

十八世紀啓蒙期になると体育は個人の完成と幸福のために必要であるとされ、肉体的鍛錬によって、心身を調和させ理想的人間の誕生を願っている。さらにその後、ドイツでは人間愛の体育から祖国愛の体育へと変化していった。この体操が国民運動となっていく。そして、体育は軍隊体育へと変っていくが、これが十九世紀の体操の基本的特色を示すものである。

その後スウェーデンでは身体的欠陥を除き調和的な発達を促進するための体育が行われ、これは人間の理性に従い、合理的なものである。徒手体操が主なるものであり、身体の各部分を、まげたり、まわしたり、ねじったりする運動法である。

さらに第一次大戦、第二次大戦を迎え、軍事体育が奨励されるようになり、強固な体と強じんな精神力をもった人間の育成が叫ばれ、体育は、もっぱら戦争のためのものと云う色彩を濃くしていったのである。

しかし第二次大戦後、一応社会的に安定すると、より健康で、より平和な、より幸福な生活を送ることを各人が希望することになり、健康維持のための体操、スポーツ、長生きのための体操、スポーツが唱導されるようになった。ただこれが軍事体育と異なるところは、より楽しく、たのしみ乍ら快適に行われる点である。軍事体育の場合には人間の体力を極限まで開発して、その開発された体力を十二分に発揮させることが

主目的であるから、ある種の苦痛、不快感をともなうし、かなりの技術的努力が要求される。それに反して、平和時の体育は各人が自身の健康、幸福、長命を目的として行うわけであり、他から強制された目的のために行うのではないので、苦痛、不快感をともなわないのが通例である。そのみでなく、より楽しく、より美しく体を鍛錬しようという要求が生まれ、種々な衣裳が考察されたり、デザインされたりする。

この結果、体操本来の目的である身体的鍛錬とか、人格陶冶は二の次となり、美への要求が主目的となってくる。

ここに体操の舞踊への接近がみとめられる。場合によっては体操の側から積極的に舞踊をとり入れて、舞踊の美しい動きのうちに体力を育成していく試みをするものもあり、逆に舞踊の側から体操に接近して舞踊のもつ身体的精神的効果について説くものも現れてくる。

かようにして現代では体操は本来の心身の育成鍛錬という目的から若干逸脱する傾向にあるが、歴史的にみたように体操は身体的運動によって体力の育成、または中世にその主な例をみたように人格的陶冶を目的とするものでなくてはならない。

体操とは、身体的運動によって（この場合種々の道具を使うことももある）。心身の鍛錬、人格的育成を目的とするものである、ということが出来るであろう。

### 第三章 体操と舞踊、その差異と共通性

前二章では舞踊と体操それぞれの立場から、その概念規定を試みた。

すなわち本来、感情内容を表現する運動が踊る動作となって現れ、それが次第に美的要求をとまなうようになり、芸術としての舞踊が誕生したのである。芸術としての舞踊は始めは忠実に感情の身体的表現に甘んじていたが、それが次第に美術におけると同様な意味での自然現象の模倣（例えば、動物のまね、植物の模倣など、さらには風のそよぎ、海の波の動きの模倣等々）に進み、さらには、感情のみならず漠然とした気分（ゆううつ、悲しみの気分等々）の表現に進み、もっと深く思想の表現、遂には理念的なもの（平和とか、幸福とか）を表現するに至ったのである。

そしてさらに美術上の抽象絵画の登場に即応するように、それまでの具体的表現に代って、抽象的表現を行うようになった。もっとも以前でも具体的表現の困難な思想内容、理念的なものの表現の場合には、ある意味で抽象的にならざるを得なかったが、この場合には抽象的形態の背後に意味が、かくされていたのであって、純然たる抽象とは云えなかった。ところが、最近では全く抽象的表現のみが単独に、即ち背後に意味内容をとまなうことなく、美を發揮しうる舞踊が登場したのである。従来舞踊には必ず内容があり、それが身体的運動を通して形式化されたのであったが、今度は形式が内容から独立して単独に美を表現することになったのである。純粹な形式あるいは形式相互間の構成が美を發揮すること。このような舞踊の抽象化は、先述の如く舞踊の体操への接近ということができる。体操は本来、肉体的成長発展を促進するため実践されるものであって、古代より身体的精神的鍛錬のためのものであった。身体

のある筋肉を鍛えるためにはこのような体操が必要であり又他の筋肉を鍛えるためにはあのような体操が必要であるというようにして体操の形式が生まれたのであった。そして感情の表現は、むしろ抑圧されなければならぬものである。したがって当然、体操の形式は内的なものの表現でもなければ、又外的な自然を模倣するものでもない。全く抽象的な形式なのである。そしてある種の運動と他の運動を組合せることにより、身体全体の筋肉の鍛錬ないしは内臓の鍛錬を行うことになるのである。この結合の仕方は美的要求とは無縁のものであって、軽い運動から始まって次第に困難な運動に向かうのが通例である。その構成は美と無関係のものであった。ところが現代的傾向としては、この構成をより美しく、又それぞれの運動も、より美しく楽しく行うという要求が大勢を占めるようになり、又いかに美しいトレーナーを着て、いかに美しく動くかということが主眼となって、身体の鍛錬は二の次という感さもある。

この体操における美的表現の要求は芸術への接近、中でも、もっとも親近性のある舞踊への接近ということになるのであろう。前述の如く舞踊はその動きが抽象的になることによって体操に接近し、体操は、美しい表現を目ざす点で舞踊に接近することになり現在の様な混然とした状況を生み出す結果となったのである。

では、つぎにこの問題をもう少し分析的にほりさげて考えてみよう。そもそも舞踊と体操が互い、このように接近するようになった背景には、両者にある種の共通性があったからである。即ち、

○舞踊も体操も、ともに表現素材がともに生きた人間であり身体的運

動を通して表現する。現代のように両者がともに美しい表現をめざすようになると表現素材としての人間そのものの美しさも要求される。勿論、舞踊の本来の美は人間の身体的運動の形式、空間形成のしかたに存在するのであって、表現素材としての人体や衣裳に美があるのではないが、やはりそれが重要な美の要素となっていることはまぬがれないであろう。

㊦ともに人間の本性、本能から生まれたものである以上、心臓の鼓動に還元されるようなリズムミカルな運動を重要な要素としている。体操の場合、身体を鍛錬するにしても人間の自然なリズムにのった鍛え方こそ、最も効果的であり最も快適なものであろう。自然に反する鍛え方は逆に健康を阻害する結果となるであろう。又舞踊の場合にも人間が本来もっている動きのリズムに合わせて体を動かせば、演者自身も快適であるし、観る者も快く、その美を眺めることができるであろう。

㊧芸術としての舞踊が抽象的形式の運動表現に進めば進むほど高度の表現技術が要求される。他方、体操も単なる体の鍛錬という素朴な目的から飛躍して、美を表現するとなると、舞踊同様の技術を要求することになる、単に美とは関係のない体の動きから美しい動き、さらには表情豊かな動きまでが要求されるようになる。現に体操競技における床運動では演技者の動きの確実性ととも柔軟性、優美さが要求されるとともに、表情豊かな演技も要求される。この様に体操では、表現技術とも云える技術の習熟が必要となってくるのである。

以上三点において、体操と舞踊は共通点をもっており、その他の点でも親近性をもっているであろう。即ち両者ともに種々な目的のために演

技されるということである。目的の多様化である。舞踊は前述のように、美の創作の他に娯楽を目的とする場合、さらには実生活上の目的をもつ場合とが考えられた、体操でもことに現代では美の追求を目的とするものもあるし、スポーツとして娯楽を追求するものも出て来たが、何よりもまず体操は身体、精神の鍛錬という実践的目的をもっている。このような目的の多様化も両者を考える場合に忘れてはならないことであろう。

では次に現在、流行しているものの中で舞踊的要素と体操的要素が混在しているものを、とりあげ、両者の関係を考えてみたいと思う。

㊦エアロビクスⅡ周知の如く米国の空軍将校により考案された身体鍛錬法で、身近な全身運動を長く持続し、空気を多く吸い続けることによって内臓を強化するものである。その具体的効果を列挙すれば、

- ①心臓の強化。
- ②血管が弾力性をとりもどし、動脈硬化の予防、治療に役立つ。
- ③血液の浄化。
- ④疲労回復。
- ⑤精神的安定、情緒の安定。
- ⑥身体の組織、細胞の機能の向上。

であるが、体の動きや、伴奏される音楽には定型がなく演者によりさまざまな動きがなされ、さまざまな音楽が使われる。ただこのさい共通なことは、全身を使って美しいフォームで解放的な気分で軽快

なりリズムにのって行うことである。即ち楽しみ乍ら身体的精神的健康を養うことを目的としている。したがって、これは現代的な体操のあり方を示唆しているといえる。

① ジャギー＝Jazz と Gymnastics が結びついたものである。したがってジャズ体操とでもよんだら良いように思われる。内容は種々雑多であって明確な概念規定はできないが、徒手体操を既成の音楽に合わせて行うものが主流であるように思われる。従来、身体鍛錬の型の連続であった徒手体操をやはりリズムミカルに、楽しく行おうとするもので、そのために既成の音楽を若干編曲したりして使うのである。ジャギーもエアロビクス同様に身心の鍛錬が究極の目的であるが、より美しく、より快適に行うという点で舞踊的要素も多分にある。

② ジャズダンス＝アメリカのジャズダンスの改革者といわれているルイジは、「私は自分の周囲をとり囲む空間をいつも感じている。自分の体を支えるために支柱は必要ではない。何故なら空間をおさえつけることで自分を支えられるからである。体の各部分をバラバラに考えるのではなく、一つの全体として使うことを考えねばならない。踊っているときは自分の存在そのものを忘れなければならない。なぜなら今からあなたは、もう今までのあなたではなくなるのである。体がサウンドにとけこんで行く、あなたは美しい音楽になろうとする。そして体じゅうのすべての部分がお互に関連をもってスムーズに動き始めたとき、そしてこれらのことが楽しみ乍らできるよ

うになったとき、そのときあなたはほんとうの意味で踊り始めたと言える。」と云っている。即ち、我々がすべての束縛をはなれ、すべての思考から解放され自分の存在を忘れたとき自分の体全体が自然に運動し、それがそのまま音楽となる、と云うのである。ジャズダンスにたずさわる人すべてがルイジと同様な思想、哲学をもっているわけではないが、ルイジのものが最も良くジャズダンスの本質をついているように思われる。ジャズダンスにおいては体の動きと音楽が完全にとけあって、どちらも他に対して優位にたつてはいかないのであって、体の動きそのものが音楽であると同様、音楽そのものが体の動きになって表われるのである。したがって音楽は基本的には既成の音楽ではならないし体の動きも既成の舞踊ではいけないのである。この意味で最も創造性の豊かなジャンルであると思われる。この種のジャンルのの中では最も芸術性の高いものであるということができるであろう。

勿論ジャズダンスの効用は種々云われるように多くあるように思われるが、何よりもまず芸術であると云うことができる。

以上のように現代にあっては、身心の鍛錬を第一目的とする場合、演者は楽しく、快適に美しく体を動かし、観るものもその美しい演技に満足する。逆に動きの美しさの表現を第一目的とする場合も、その結果、身体的精神的に鍛錬陶冶されるということになる。

そして第一目的の相異こそあれ、体操的側面（身心の鍛錬）と舞踊的側面（美の表現）の両面を共有して、従来のようにこれが体操であ



り、これが舞踊であると云うように判然と区別し難いのが現状であると思われる。

あとがき

以上、体操と舞踊という発生的には全く異なる二つのジャンルをとりあげ、歴史的にその概念をあとづけ乍ら現代のジャズダンス、ジャギー、エアロビックスなどの各ジャンルを解釈してみた。

その結果、現状では体操も舞踊も共に滲透し合い、どこからどこまでが体操であるとか、舞踊であるとかいうことができなくなってきた。

すべての体操が舞踊的要素をもち、すべての舞踊が体操的效果をもっているといえるであろう。

現代すべての文化活動は、大衆の参加の時代であり、体操と舞踊も観るだけでなく参加する方向に向かっている。そしてこの場合、各人がより楽しく美しく体を動かして自己を表現するということが必要である。

この意味ではルイジのいうジャズダンスが、ある意味で、これからの舞踊ないし体操の進むべき方向ではないかと思われる。

#### 参考文献

岸野雄三「体育の文化史」昭和三四年 不昧堂出版

増田正造「能の表現」昭和四六年 中央公論社

邦正美「舞踊の美学」昭和四八年 富山房

ルイジ、ケネス・ワイドロー「ルイジのジャズダンステクニック」昭和五七年 主婦の友社

ENCYCLOPEDIA BRITANNICA

ENCYCLOPEDIA AMERICANA